

# 私の一冊

社会福祉学科 伊藤恵美 先生

大野更紗著 『困ってるひと』

小鹿図書館 : 490.4/O 67 (ポプラ社)

これまでいわゆるマイノリティと言われる人々の語りに関心を持ってきた。社会福祉について考えるとき、問題に直面している当事者の語りから出発することが大切だと考えている。それには当事者が綴った手記や闘病記を読むという方法はとても有効だと思う。

当事者の語りに関心を持つようになったのは、大学、大学院生時代に指導教授の研究活動を手伝い様々な社会調査に携わってからだ。事前に調査協力依頼文を送っているとは言え、突然訪問してきた一学生に1時間から2時間もかけて質問に答えてくれる地域住民の皆さんの親切が本当に嬉しかった。振り返ると、たくさんの調査対象者の方々との出会いは、自分の社会福祉に対する考え方に大きな影響を与えたと思う。

社会福祉学部の学生であったから生活保護制度について基礎的な知識はあったが、しかし、高齢女性の調査対象者の方から冬でも暖房を使わず生活費を切り詰めていることを聞いて心底驚いた。極寒の東北の地で暖房を使わないことは健康を害することにつながりかねない。この方は暖房費を切り詰めていつ必要になるかもしれない香典費用をねん出したいと言った。「近所の人のお葬式には出たいよね」というつぶやきから、この方が近隣の方との付き合いを大切に考えていることがよくわかった。ある時は訪問したお宅で出してくださった湯呑茶碗の底からみるみるお茶が滲み出してきたことがあった。湯呑茶碗をよく見ると縦に一筋大きなヒビが入っていた。高齢男性の調査対象者の方が「わるがったねえ…」と言いながらテーブルを拭いてくださる姿に、見てはいけないものを見てしまったようないたたまれない気持ちになった。

生存できるギリギリ最低の衣食住さえ揃えばそれが「生活」と言えるのだろうか？近所のお葬式に出席する、お客にお茶を出す、ということも「社会関係」の構築と維持という点で重要な生活を成す要素ではないだろうか？湯呑茶碗がなくてお客にお茶を出せないとしたら、それは「健康で文化的な最低限度の生活」と言っているのだろうか？といった素朴な疑問が大きくなっていった。テキストで読んだ「貧困」、「相対的剥奪」の意味を切実な現実を通して知った経験だった。

全ての現場に行き行って直接話を聴くことはできなくても、当事者が書いた手記や闘病記はいつでも手に取ることができる。近頃刊行されたものでとてもおもしろいと思ったのが大野更紗さん

著『困ってるひと』だった。大野さんは大学院生の時に自己免疫疾患を発症した難病当事者として、自らのこれまでと今を冷静かつユーモアを交えて書き綴っている。発病当初から彼女の抱える症状は凄絶で自力で歩けない、治療は前例がないため手探りでやるしかない、福祉サービスは居住区によって異なる上に複雑、症状が治まっても退院を急かされる、おしりたぶが炎症を起こして腫れた上に大量に流出する、などなど彼女にあらゆる「難」が降りかかる。大野さんが「難」と闘っている過程には福祉制度や医療制度の抱える問題が露わにされると同時に、「人を支援する」とはどういうことなのかを考えるのに重要な示唆が含まれていると思う。闘病記の要素を含みつつエッセイとしてとてもおもしろく、非常事態の場面なのに思わず笑ってしまう描写がたくさんある。難病患者支援において福祉制度とソーシャルワーカーはどうあったらよいかを考えるとともに、決して他人事ではない自分のこととして読んだ本だった。